提言

私たちが生活している松本地域では、年間千人を超える人たちが、交通事故の被害にあっています。
その中には、尊い命を失ったり、一生涯病院のベッドで治療を続けなければならない人がいると聞きました。
普段の何気ない日常が、一瞬で無くなってしまう交通事故。
そんな悲惨な交通事故がこの世から無くなるため、学生である私たちの立場から、提言をします。

「親の姿」
交通安全を日常的に意識するには繰り返しの教育が必要です。学校等で行われる教育は年に数回であり、効果も長くは続きません。そこで家庭での教育が重要になります。子供と一緒に道路を渡る際に、きちんと横断歩道を歩いていますか？信号は守っているでしょうか？子供が一番影響を受けるのは、交通安全教室ではなく親の姿です。子供が一人で同じ行動をしても安心できるよう日頃の意識が大切だと思います。

「常識というキケンな言葉」
自転車は左側通行、夜間はライト点灯。「知ってるよ、常識だもん。」私はこの「常識」という言葉が交通ルールの本質を隠しているように思えます。そこで「なぜ？どうして？」を使います。例えば「既に“止まれ”の標識があるのに、どうして“自転車も止まれ”という本来必要の無い標識が付加されているの？」など、当たり前にあるものやルールに一度でも疑問を抱くことで、薄っぺらな常識としてではなく、自身の教養としての交通マナーを身につけられると思います。

「もう一度見直そう」
小、中学校もしくは高校で多くの方が自転車の交通安全教育を受ける機会があったかと思います。しかしその時には、学校のカリキュラムだから参加するなど自転車マナーに向き合うチャンスを無駄にしていると感じます。教育は自転車を安全に利用するためのルールを教えることそして、私達の命を守るために行われています。少しでも危険な乗り方をしていると感じたらぜひ一度自転車教育に参加し、自身の乗り方を見つめ直してみて下さい。

「ドライバー目線を考えて行動」
交通安全教室などでも死角について習ったりするように、ドライバー側から見えない位置もあるし、夜だと黒い服着ている人はとても見えにくいです。自転車対自動車の事故を減らすには、運転シミュレーターを交通安全教育に取り入れる等して、ドライバー目線を体験して貰って、自転車側、特に免許を持っていない学生にそういったドライバー目線を知ってもらい、相手から自分がどう映るかを考えて貰うことが大切なのではないかと考えました。

平成３１年３月７日

松本大学　福岳　貴史
松本大学　菊池　薫
松本大学　百瀬　愛
松本大学　赤羽　陽南乃